「君はジムのえのぐをもっているだろう。ここにだしたまえ。」
そういってその生徒はぼくのまえに大きくひろげた手をつきだしました。そういわれるとぼくはかえって心がおちついて、
「そんなもの、ぼくもってやしない。」
と、ついでたらめをいってしまいました。そうすると三、四人の友だちといっしょにぼくのそばにきていたジムが、
「ぼくはひる休みの前にちゃんとえのぐ箱をしらべておいたんだよ。一つもなくなってはいなかったんだよ。そして昼休みがすんだら二つなくなっていたんだよ。そして、休みの時間に教場にいたのは君だけじゃないか。」
と、少しことばをふるわしながらいいかえしました。
ぼくはもうだめだと思うときゅうに頭の中に血が流れこんできて顔がまっかになったようでした。するとだれだったかそこに立っていたひとりがいきなりぼくのポッケットに手をさしこもうとしました。ぼくは一生けんめいにそうはさせまいとしましたけれども、たぜいにぶぜいでとてもかないません。ぼくのポッケットの中からは、みるみるマーブルきゅう(今のビー球ことです——編者註)やなまりのメンコなどといっしょに二つのえのぐのかたまりがつかみだされてしまいました。
「それみろ」といわんばかりの顔をして子どもたちはにくらしそうにぼくの顔をにらみつけました。

ぼくの体は、ひとりでにぶるぶるふるえて、目の前がまっくらになるようでした。いいお天気なのに、みんな休み時間をおもしろそうに遊びまわっているのに、ぼくだけはほんとうに心からしおれてしまいました。あんなことをなぜしてしまったんだろう。とりかえしのつかないことになってしまった。もうぼくはだめだ。そんなに思うとよわむしだったぼくはさびしく悲しくなってきて、しくしくとなきだしてしまいました。
「ないておどかしたってだめだよ。」
と、よくできる大きな子がばかにするようなにくみきったような声でいって、動くまいとするぼくをみんなでよってたかって二階にひっぱって行こうとしました。ぼくはできるだけ行くまいとしたけれどもとうとう力まかせにひきずられてはしごだんをのぼらせられてしまいました。そこにぼくのすきな受持ちの先生の部屋があるのです。
やがてその部屋の戸をジムがノックしました。ノックするとは、はいってもいいかと戸をたたくことなのです。中からはやさしく、
「おはいり。」
という先生の声がきこえました。ぼくはその部屋にはいるときほどいやだと思ったことはまたとありません。
なにか書きものをしていた先生は、どやどやとはいってきたぼくたちを見ると、少し驚いたよう